

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02562

研究課題名（和文）発達障害のある児童を含むインクルーシブな小学校国語科授業の教材開発

研究課題名（英文）Development of teaching materials for inclusive elementary Japanese language classes including children with developmental disabilities

研究代表者

原田 大介（HARADA, Daisuke）

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：20584692

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：（1）国語の教科書教材等の表象で不在にある障害当事者の存在を想像して読むこと。（2）国語の教科書教材等で障害当事者が表象されることで、逆に不在にある障害当事者の思いや願い、経験を想像して読むこと。（3）国語の教科書教材等で障害当事者が表象されることで不在にされた、他の社会的困難を生きる当事者の存在を想像して読むこと。（4）障害当事者を含む社会的困難を生きる当事者が、健常者等の社会的強者とのあいだにある差別構造や権力関係の変革を想像して読むこと。

本研究成果は、上の4点を小学校国語科における読むことの視座として導入したこと、ならびにインクルーシブな教材の原理として位置づけた点にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インクルーシブな小学校国語科教育の教材原理の構想をめざした本研究は、「読むこと」をめぐる視座から国語科授業を实践する小学校教員の授業観や指導観を問いなおした点、並びに、小学校の国語科授業を受ける児童の学びに還元した点に、社会的意義を認めることができる。

また、国語科教材論の基盤に位置づく学力論・目標論を検証し、新たな学力観・目標観を提示した本研究の成果は、教科教育学としての国語科教育学研究に資するだけでなく、教員養成や教師教育の研究にも資するものである。ここに、本研究の学術的な意義を認めることができる。

研究成果の概要（英文）：(1) Reading Japanese language teaching textbooks and other materials in a way that enables students to imagine the existence of people with disabilities who are not represented in such textbooks and materials. (2) Reading Japanese language textbooks and other materials in a way that enables students to imagine the thoughts, wishes, and experiences of people with disabilities, which are often absent from their representations in such materials. (3) Reading Japanese language textbooks and other materials in a way that enables students to imagine the existence of other people living with difficulties in society, who are often overlooked due to the representation of people with disabilities in such materials. (4) Reading such materials in a way that enables students to imagine changes in discrimination structures and power relations between people living with difficulties in society, including people with disabilities, and those with more power, such as nondisabled people.

研究分野：教科教育学 / 国語科教育

キーワード：国語科教育 インクルーシブ教育 教材開発 発達障害 授業研究 カリキュラム開発 初等教育 教科書研究

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年の小・中学校国語の教科書における障害の描かれ方には課題がある。その課題は、大きく二つ指摘できる。

一つ目の課題は、発達障害や知的障害といった精神・知的面での障害を描いた内容の教材が十分に採録されていない点にある。国語の教科書では、白杖、車いす、義足といった「他者から見える／見えやすい障害」や「他者から障害だと気づきやすい／気づかれやすい障害」を描いた内容を中心に採録されている。この傾向は障害を描いた国語の教科書教材全般に見られるものであるが、特にパラリンピックやオリンピックを話題にした教材には顕著にあらわれる。たとえば、「パラリンピックが目指すもの」(東京書籍、小学三年下)では、「重度しょうがい者もさんかできるような考えられたスポーツ」として競技の「ボッチャ」が取り上げられている。この教材には「ボールをうまく持てなかったり、運べなかったりする選手」(p.15)という表記もあり、動作・行動面の難しさだけでなく精神・知的面での難しさのある当事者も想定されているようにも読める。しかし、「選手にアドバイスをしたり合図を送ったりすることはできません」(p.15)という一文がその表記のすぐ後に続くことから、この競技の選手には、自分だけで考え、行動することのできる自立した主体が想定されている。本文には「重度しょうがい者もさんかできる」とあるが、ここにある「重度しょうがい者」の対象には、運動・行動面での困難のある当事者が想定されており、精神・知的面での困難だとは言えない。

自立した主体を想定し、順位を決めることを前提とするパラリンピックやオリンピックというイベントには、精神・知的面で困難のある当事者の存在を不可視化する構造がある。このことは、国際パラリンピック委員会(IPC)や国際オリンピック委員会(IOC)という個別の組織が抱える課題である。だが、パラリンピックやオリンピックをめぐる話題を国語の教科書に採録することにより、国語の教科書にも精神・知的面で困難のある当事者の存在を不可視化する事態が生まれている。精神・知的面で困難のある当事者の存在を不可視化する国語の教科書を読み続ける小・中学校の子どもたちは、発達障害や知的障害といった精神・知的面での困難を十分に理解することができない。知的障害のある当事者をからかいの対象に位置づける子どもが地域によって一定数見られるのは、精神・知的面での困難を生きる当事者の思いや経験が、障害の視座から十分に理解されていないことを示している。「他者から見える／見えやすい障害」や「他者から障害だと気づきやすい／気づかれやすい障害」を描いた内容を中心に採録し、精神・知的面での障害を描いた教材を採録しない国語の教科書は、精神・知的面での困難のある当事者の存在を不可視化する事態に加担している。

二つ目の課題は、国語の教科書では、障害当事者が自身の苦難を乗り越え、社会的に評価された生き方をした内容が採録されやすい点にある。

たとえば、「夢を跳ぶ」(教育出版・中学二年)という教科書教材がある。筆者は義足を使用する当事者である谷真海氏であり、自身の履歴を振り返る構成になっている。教材本文では、次のような記述(～)の展開が見られる。19歳のときに疾病(足首の骨にできた悪性の腫瘍)による足の切断、足を失うことへの不安・挫折、パラリンピックに出場するという夢や目標をもつ、走り幅跳びの選手として日本記録とアジア記録を更新する、東京オリンピック・パラリンピックの招致メンバーとして開催地を決める最終プレゼンテーションの場でスピーチをする、結婚・出産する、パラトライアスロンに種目を変えて大会で優勝する、現在も講演等で活躍している。教材「夢を跳ぶ」に描かれた、苦難と向き合い国際的な大会で活躍する筆者

の姿に勇気づけられ、励まされる子どもたちがいることが推察される。また、筆者が生まれたのは宮城県気仙沼市であり、2011年の東日本大震災では実家も被災したことが本文に記されている。子どもたちの中には、本教材を「東日本大震災後を生きる当事者」としての回復の物語として読む者もいることだろう。他方で、この教材の筆者は本文にもあるように、「二〇〇四年アテネ、二〇〇八年北京、二〇一二年ロンドンと、三大会連続でパラリンピックへの出場を果たした」(p.74)選手であり、「二〇一三年には、日本記録とアジア記録を更新することができた」(p.74)選手である。また、「二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の招致メンバーとして活動」(p.75)し、「開催地を決める最終プレゼンテーションの場でスピーチ」(pp.75-76)をするなど、ごく限られた者にしか実現し得ないことを多く成し遂げている。このことから、本教材を社会的成功者の物語として読むことも可能である。もとより障害者の多くはパラリンピックに縁もなければ、強い関心があるわけでもない。国語の教科書では、「スーパーヒューマン」(井芹 2018:141)や「スーパークリップ」(辰己 2022:129)とも呼ばれるような社会的成功を成し遂げる特別で超人的な障害者が頻繁に取り上げられ、特別でも超人的でもない障害当事者が自身の複雑な生と向き合うような教材は採録されにくい状況が続いている。

また、教材「夢を跳ぶ」では、「結婚」や「出産」(p.76)といった出来事が他の社会的成功を示す出来事と併記されている。このことにより、筆者の意図とは別に、「結婚しない/できない」「出産しない/できない」障害当事者の生を間接的に否定する内容構成になっている。この教材を読む通常の学級に在籍する障害のある子どもたちが、障害当事者として社会で生きていくには新記録を出したり、優勝するといった社会的成功が求められていること、ならびに、結婚や出産は良いこと/すべきことである、といった価値観を内面化する可能性は否定できない。障害のある子どもたちだけでなく、障害非当事者である子どもたちもまた、健常者の立場からの障害理解/障害者理解として、上記の価値観を内面化していくことも考えられる。ここでは教材「夢を跳ぶ」のみを取り上げたが、「見えないチカラとキセキ」(三省堂、中学二年)や「言葉でつかんだ世界」(教育出版、中学三年)においても、パラリンピックでの優勝体験といった社会的成功を挙げた障害当事者の物語を軸にして展開されている。社会的な何かを成し遂げていない/成し遂げることのない/成し遂げるつもりもない、ごく一般的な障害者の生が描かれていない、という点では、これらの教材にも同様の問題を指摘できる。

以上のように、小・中学校の国語の教科書における障害の描かれ方には課題が多い。近年、各教科・領域では教科・領域のインクルーシブ化が指摘されつつあるが、日本授業UD学会の取り組みに見られるように、その研究アプローチは授業方法(方法論)に限定されている。方法論だけでなく、目標、内容、評価といった視座にも着目し、教科書教材を中心とする教材(学習材)のインクルーシブ化をめぐる議論が問われている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、通常の学級に在籍する発達障害のある児童を含むすべての児童に必要な「ことば」の育ちや学びのあり方を検証し、インクルーシブな国語科授業の教材開発に向けて、その教材原理を構想することにある。本研究では、特に小学校の国語の教科書教材に焦点を当て、その課題を検討する。

## 3. 研究の方法

本研究では、国語科教育に「クリップな読み」の視座の導入を試みる。「クリップ clip」とは、障害のある当事者に向けられてきた、主に健常者/定型発達者からの侮蔑語である。健常主義社

会に対する抵抗やプライドを表す自称として障害当事者が意図的に、かつ、戦略的に用いてきた歴史がある。2000年代に障害学でクリップをめぐる議論が理論的な枠組みとして整理され、現在ではフェミニズムやクィア理論など、他の学術領域と交差するなかで展開されている。「クリップな読み」とは、クリップをめぐる議論から生まれた「読み」をめぐる考え方である。国語科に「クリップな読み」を導入することで、これまでは国語の教科書教材等で不可視化されてきた障害当事者の思いや願い、経験といったものを、学習者は「読む」ことが可能となる。ここでの「読み」とは、知る、解釈する、熟考する、といった学校教育の文脈で用いられる意味から、気づく、発見する、察する、想像する、創造する、問いなおす、批判する、といった、読むという言葉行為のプロセスで生まれるものまで含めて考える。書かれていないものを想像して読む、書かれているけれどその内容とは別の可能性を読むといった読む力は、もとより国語学力に位置づくものである。同様に、国語の教科書教材等で不可視化された障害当事者の存在を「読む」こともまた、国語学力の一つであるべきだと考えた。

以上を踏まえ、本研究の方法は、次の通りである。(1)障害を描いた国語の教科書教材の動向と課題を確認する。(2)その課題を踏まえた上で、国語科教育学研究で取り組むべきことを考える。(3)障害学におけるクリップの概念や理論が生まれた背景を確認し、「クリップな読み」について考察する。(4)「クリップな読み」を導入した国語科授業の方向性を提案する。

#### 4. 研究成果

国語教科書における障害当事者の抹消/不在に抗するために、言語行為を育む国語科教育には、どのような読みの考え方を導入すればよいのか。辰己は障害者の抹消/不在に抗するために求められる読解の態度として、クリップとクィアの概念を交差させて論じる Alison. Kafer の議論から得た知見を援用した上で、次のように述べている。

Kafer が常に意識している読解の態度とは、障害者の存在が見当たらないように思われる物語の中にも、障害者を 抹消 した痕跡がないかを絶えず探索し、むしろそこに障害者の存在を積極的に読み込もうとすること、あるいは、障害者の物語の中にも他の存在が 抹消 された痕跡がないかを粘り強く精査し、そこに女性やクィアなど、様々な当事者の存在を読み込もうとすることであるといえる。こうした読みの実践は、それぞれ違う場所にいると今まで考えられてきた人々同士が交<sup>インターセクション</sup>差 点 で出会い、運動をともにすることを想像可能にする。(辰己 2022:132)

辰己がクリップをめぐる議論から提起する「読解の態度」や「読みの実践」とは、障害当事者が描かれていない物語において、むしろ積極的に障害当事者の存在を読む込むこと、また、障害当事者が描かれた物語においては、女性やクィアといった他の社会的困難を生きる当事者の存在を読む込むとすることにある。辰己は Mitchell と Snyder の物語論を軸にして論を展開しているために物語と表現しているが、ここにある物語とは、より広く表象と置き換えることも可能である。不在にある者を可視化することや、可視化されることでステレオタイプな読みを押し付けられることによって逆に不在にされている者を想像することの重要性は、クリップとパラレルな関係にあるクィアをめぐる理論においても繰り返し論じられてきた視座である。クィア理論における「「読み」の実践」の可能性を論じる斉藤綾子は、可視と不可視の関係を次のように述べている。

可視、不可視の問題は、実は、イメージの政治学、あるいは表象の政治学という問題以上に、やはり「読み」の可能性が試されていると私には思える。(略=原田)「読み」の政治は常に不在

の構造を明らかにするという実践を伴っていた。隠された意味を露見させるというのが、「読み」の政治であったと言えよう。(略=原田)「読み」の実践は、同時に近代の抑圧や検閲の構造をも明らかにしていく作業でもあった。隠蔽の構造、抑圧の構造、いずれも、権力との関係において、「見えない」存在に光を当てることが「読み」の実践だった。正確には、「見えない」だけでなく、「聞こえない」ものを回復させる試みだったと言える。つまり、姿はあるが声を奪われている、あるいは、姿はないが声を上げるという可視の断片から「不可視」の存在を辿っていくという行為が読みである。(略=原田)「読む」という実践は、不可視のものを可視化する、隠れた意味を探し出す、という行為で完結することはない。むしろ、「そこにあるもの」「現前しているもの」が現前していく過程で、何を失い、何を隠蔽し、何を前景化し、何を排除しているか、という重層的な関係で考えていくプロセスなのではないか。(斉藤 2010:19-20)

斉藤が提起する「「読み」の実践」にあるように、表象における障害当事者の抹消/不在に抗するためには、不可視のものを可視化する、隠れた意味を探し出す、といった読みで終えるのではなく、「そこにあるもの」「現前しているもの」が現前していく過程で、何を失い、何を隠蔽し、何を前景化し、何を排除しているか、といった読みが求められる。クィアの理論を展開する斉藤の「「読み」の実践」は、辰己から引き受けたクリップな読みの態度や実践を具体化していく上で示唆に富む。辰己や斉藤の議論を踏まえると、国語科教育に導入することを想定した「クリップな読み」とは、次の4点に整理できる。

- (1) 国語の教科書教材等の表象で不在にされている障害当事者の存在を想像して読むこと。
- (2) 国語の教科書教材等で障害当事者が表象されることで、逆に不在にされている障害当事者の思いや願い、経験を想像して読むこと。
- (3) 国語の教科書教材等で障害当事者が表象されることで不在にされた、他の社会的困難を生きる当事者の存在を想像して読むこと。
- (4) 障害当事者を含む社会的困難を生きる当事者が、健常者等の社会的強者とのあいだにある差別構造や権力関係の変革を想像して読むこと。

本研究の成果は、上の4点を国語科における「読むこと」の視座として抽出したこと、ならびに、小学校国語科授業におけるインクルーシブな教材の原理として位置づけた点にある。

#### 引用文献

- 井芹真紀子(2018)「異なる身体」の表象 ダイバーシティ言説とネオリベラルな健常主義」青沼智・池田理知子・平野順也編『メディア・レトリック論 文化・政治・コミュニケーション』ナカニシヤ出版、pp.135-147
- 教育出版(2021)「読書への招待 夢を跳ぶ」『教師用指導書 伝え合う言葉 中学国語2 PDFファイル版』教育出版、pp.230-245
- 斉藤綾子(2010)「可視と不可視の間に あるささやかな考察」クィア学会編『論叢クィア』Vol.3、pp.9-23
- 辰己一輝(2022)「交差点へとアクセスする 障害者を 抹消 する物語に抗して」『現代思想』第50巻第5号、pp.124-133
- Kafer, Alison. 2013. *Feminist, Queer, Crip*, Indiana University Press.
- Mitchell, David T. and Snyder, Sharon L. 2001. *Narrative Prosthesis : Disability and the Dependencies of Discourse*. University of Michigan Press.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原田大介	4. 巻
2. 論文標題 国語科インクルーシブ教育に関する研究の成果と展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語科教育学研究の成果と展望	6. 最初と最後の頁 553-560
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田大介	4. 巻 24
2. 論文標題 「共生」の観点から見た国語科教育の問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田大介	4. 巻 366
2. 論文標題 「個別最適な学び」を考える 特別支援教育の視点から 一人ひとりの子どもの実態に寄りそう国語の授業 開き・授業づくりへ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践国語研究	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田大介	4. 巻 866
2. 論文標題 国語科授業のインクルーシブ化に向けた視点とは	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原田大介
2. 発表標題 インクルーシブな教科「国語」をつくる 規範を問いなおす理論の導入へ
3. 学会等名 シティズンシップ教育研究大会2022シンポジウム「インクルージョンとシティズンシップ 教育においてどう結びつけるか」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原田大介
2. 発表標題 国語科教育のインクルーシブ化に向けて
3. 学会等名 広島大学、定例オンラインセミナー講演会No.89（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------